

明日香村社寺建築の調査

建造物研究室

近世社寺建築の調査はすでに全国的に行なわれて軌道に乗っており、当研究所の立地する奈良県においても近年中に実施の予定である。それへの足固めとして、また一地区を悉皆的に調査する意図のもとに、明日香村を対象として取り上げ、地元である飛鳥藤原宮跡発掘調査部と飛鳥資料館の建築の研究員が調査を担当し、村内すべての社寺を巡った。村内38の大字ごとにほぼ一箇所以上の神社・寺院があり、社寺が生活に密接した存在であったことを物語っている。一次調査を行なったのは神社が31件62棟、寺院が40件82棟である。年代的には19世紀以後のものが大半を占めるが、17世紀の遺構が2棟（下記および祝戸・専称寺観音堂）あり、18世紀の遺構を中心に神社3件3棟、寺院12件19棟について二次調査を行なった。

神社本殿の形式をみると、見世棚造を含めて春日造が圧倒的に多く、この地方においても広く分布していたことが知られる。他は流造で、それ以外の形式は見られない。規模は一間社がほとんどであり、現存の社殿は明治時代以降のものが大半を占めている。本殿では三間社流造の川原・板蓋神社本殿が17世紀後期と推定され、最古の遺構となる。春日造の代表例は真弓・櫛玉命神社本殿があげられる。やや洗練を欠く地方作で改造も加わっているが、当初は18世紀後半にはさかのぼるものであろう。本殿を持たぬ神地遥拝形式を守る飛鳥・飛鳥坐神社の拝殿は、切妻造で内部2本の柱を棟持とする変わった形式を持ち、18世紀中期の作と思われる。この他に近世の拝殿はほとんど残存していない。

寺院では、まず巡礼地として栄える岡・竜蓋寺（岡寺）が建築の質量共に屈指の存在である。仁王門（1612）が国指定、書院及び楼門（いずれも17世紀初）が県指定を受けている他、寛政5年（1793）の建立と伝える本堂も、前面一間通り吹きはなちとした部分の天井まわりの意匠に迫力がある。また、古代の大寺を受け継ぐ寺院があるのもこの地方の特色であり、安居院（飛鳥寺）、弘福寺（川原寺）、橘寺などが挙げられる。宗派別では浄土宗が七割を占める。岡・常谷寺本堂（1817）、稲洲・竜福寺本堂（19世紀前期）が整備された浄土宗本堂の代表例であるが、一方祝戸・専称寺本堂（18世紀後期）などのように一棟で堂・庫裏を半ばする建築も多い。

今回の調査では棟札の確認できたものは少なかったが、鬼瓦に銘を持つものが多く、建立年代の推定に参考となった。社寺を通じて年代の確定する最古のものは上・長安寺薬師堂である。近年瓦を葺き替えたのをはじめ、内部にも一部改造があるが、細部に古い絵様がみられ、棟札年記は宝永2年（1705）であった。近く報告書を刊行の予定である。（松本修自）

上・長安寺薬師堂